

輝きを求めて 日本高純度化学 4
一部上場で鐘を再び 次の目標へ強まる求心力

日本高純度化学はジャスダック上場の後、1年3ヵ月後の今年3月22日に東証二部上場を果たす。予算管理や目標管理などのベースができていたため、ジャスダック上場時ほどの労苦はなかった。

むしろ「東証上場企業の製造業としては最も従業員数の少ない(30人) 特異なビジネスモデルを有する企業」であることを理解してもらうために多くの時間を割いた。東証からは何度も「この人数で大丈夫ですか」と確認された。

そして上場当日。各部門から数人が東証におもむいた。その数、全従業員の約半分にあたる13人。ジャスダック上場時に、下田益弘副社長は「自社に初値がつき、さまざまなセレモニーがあった。この感動を次はみんなにも味わってほしい」との思いからだった。

東証ゆかりの鐘を、社員が順番に5回鳴らした。上場に当たって、役員以外が鐘を鳴らすことはまれ。それでも、同社が「全員で」とこだわったのは「みんなで(上場を)やったから」である。

ジャスダック上場直前に中途入社し、東証二部上場の準備に忙殺された岩本洋介総務課長も鐘を鳴らした一人。「以前に勤務していた(上場していた)会社では証券取引所にくることなど考えられない。感激した」。上場の感慨は創業者しか味わえない。これを社員も味わえたのである。

帰り際、内田薫経営企画室長は東証の社員から「もう一度、鐘をつきにきてください」といわれた。次のターゲットが見えた。東証一部である。「みんなでこよう。鐘を鳴らそう」。平岩専務はこれを求心力という。好業績をあげ、一部上場を果たそうという全員の意志だ。ちなみに、内田室長は「必ずきます」と即答した。

ところで、ジャスダック上場準備中に内田室長の身分は変わっている。出向から同社の社員になったのである。上場時に必要とされる書類をそろえている段階で、上場責任者が出向ではまずいと監査法人に指摘されたため、その場で転籍を決めた。上場のことしか頭になかった。

名実ともに日本高純度化学の社員になった内田室長の下には、これまた「ヘッドハンティングされ、初めて会社を訪問したその日に決心した」岩本課長がいる。兩人とも「自分たちの意志で直接かじ取りできるフィールドが目前に開けている。冒険だが面白い。これこそ社員冥利に尽きる」と口をそろえる。その言葉通り、ジャスダック、東証二部上場と舞台が用意され、会社も変わってきた。大きな組織の中で着実な道を歩むか、小さくとも自らが原動力となれる組織でダイナミズムを肌を感じながら急峻な山を登るか。後者はサラリーマンなら誰でもが夢見るが、誰でも実現できるものではない。「その機会を得た幸運を感じる」と岩本課長。

ちなみに、ジャスダック上場後、同社の業績は計画を下回ったことがない。とって、達成可能な範囲で計画を策定しているわけでもない。「計画を達成することが積み重なって、社会に信頼される会社になる」(平岩専務)と実感している。

(ライター 片岡緑)
月曜日に掲載